

荒神山おんまわし遺跡Ⅳ 窪畑遺跡Ⅱ

緊急地方道整備事業 県道与地一辰野線拡幅
事業に伴う平成3年度発掘調査概要報告書

1991. 12

長野県辰野町教育委員会

序

今回県道与地辰野線、樋口下田地区の拡幅事業に先立って調査が実施された荒神山おんまわし遺跡・窪畑遺跡は、縄文時代・弥生時代・平安時代にまたがる複合遺跡で、周辺には弥生時代の遺跡が密集する地域です。この地域は辰野町内でも特に弥生時代の遺跡が多く、特徴的であります。しかし近年この地域は大規模な開発が実施され、貴重な遺跡が消滅しつつあります。埋蔵文化財は一度破壊すると元に戻らないものであり、非常に貴重な文化財です。

定められた短い期間ではありましたが、関係者の皆さんのおかげで無事に刊行の運びとなりました。この報告書を熟読吟味していただき、この機会に町の歴史と文化に思いを致すと共に埋蔵文化財の重要性を再認識していかなくてはなりません。

最後に調査に御協力頂いた皆様に感謝申し上げるとともに今後とも文化財行政に御協力賜りますようお願い申し上げます。

平成3年12月

辰野町教育委員会
教育長 小林 晃一

例 言

1. 本書は、長野県上伊那郡辰野町大字樋口に所在する荒神山おんまわし遺跡の第4次、および窪畑遺跡の第2次発掘調査概要報告書である。
2. この調査は緊急地方道整備事業、県道与地-辰野線拡幅事業に先立って実施された。
3. 発掘調査は1991年6月1日から10月16日まで現場作業を実施し、同年11月1日から12月25日まで整理作業を行った。
4. 発掘調査現場における記録は福島永が行い、遺構等の実測図の作成は大森淑子・三浦孝美・上島元彦が行った。また、本書の作成は福島があたり、遺物等の実測図等の作成は大槻直子・佐藤直子・白鳥栄子・福島が行った。

発掘調査関係者名簿

1. 発掘調査団

調査団長	友野良一（日本考古学協会会員・宮田村）
調査員	福島永
発掘調査協力者	大森淑子・長田作衛・桑沢とよ子・城倉けさみ・茅野安男・中谷あき子 山崎馨・山崎君男
整理作業協力者	宇治ひろゑ・大槻直子・大森淑子・工藤信子・佐藤直子・白鳥栄子 村上茂子

2. 事務局

教育長	小林晃一
社会教育課長	赤羽八洲男
文化係長	平泉栄一
文化係	三浦孝美・福島永

目 次

I	はじめに	1
II	調査概要	5
	1. 荒神山おんまわし遺跡	5
	2. 窪畑遺跡	8
III	まとめ	15

I はじめに

調査の動機

辰野町樋口に存在する荒神山おんまわし遺跡・窪畑遺跡は平成元年度の圃場整備事業において調査が実施された。その結果、縄文時代の住居址・弥生時代の住居址や周溝墓・平安時代の住居址などといった遺構が多数発見された。

今回の調査の契機となった県道与地－辰野線の緊急地方道整備事業に伴う発掘調査は、昭和62年に樋口区下田の樋口五反田遺跡の調査を皮切りにして、平成2年には草堀遺跡が調査の対象となった。今回の調査については、平成2年度に伊那建設事務所より、県道拡幅事業に伴う発掘調査について保護協議を実施したい旨の連絡をうけ、同年6月に行った結果、平成2年度と平成3年度の工事区域において遺跡が含まれていることが判明し、平成2年度分は12月24日より平成3年1月30日まで調査を実施した。また、平成3年度分については、土地買収が終了し次第調査を行う旨を申し合わせた。

平成3年5月に伊那建設事務所より買収が終了したとの連絡をうけ、6月1日より9月20日まで、10月14日から10月16日までの2回に分けて当該区域の調査を実施した。

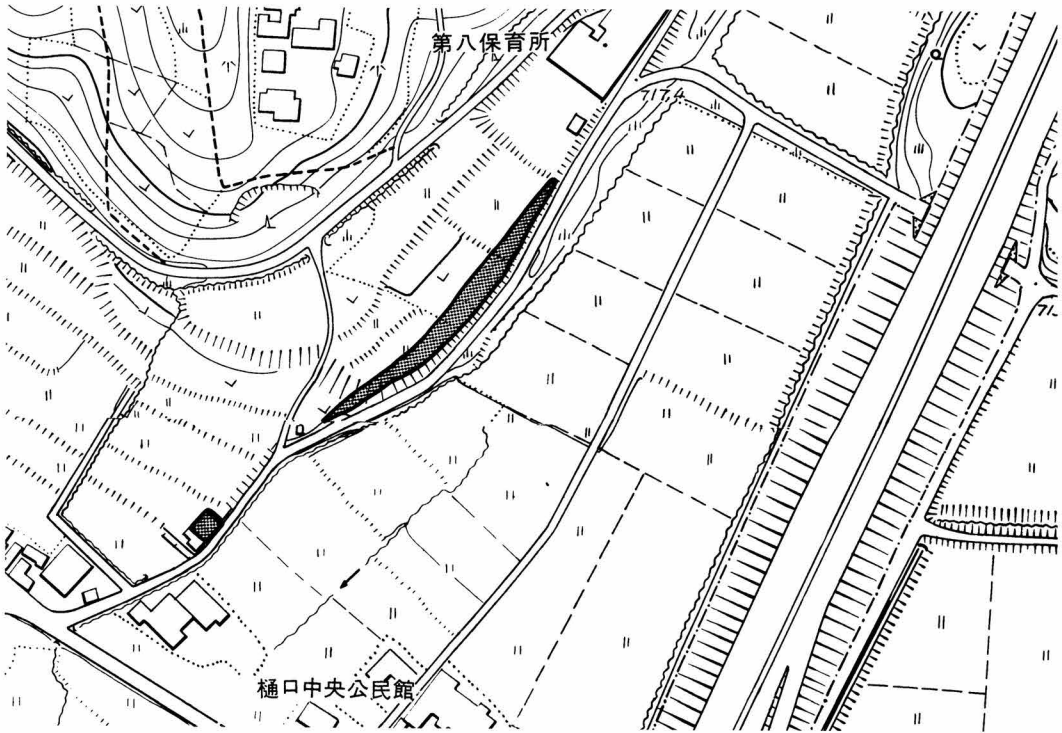
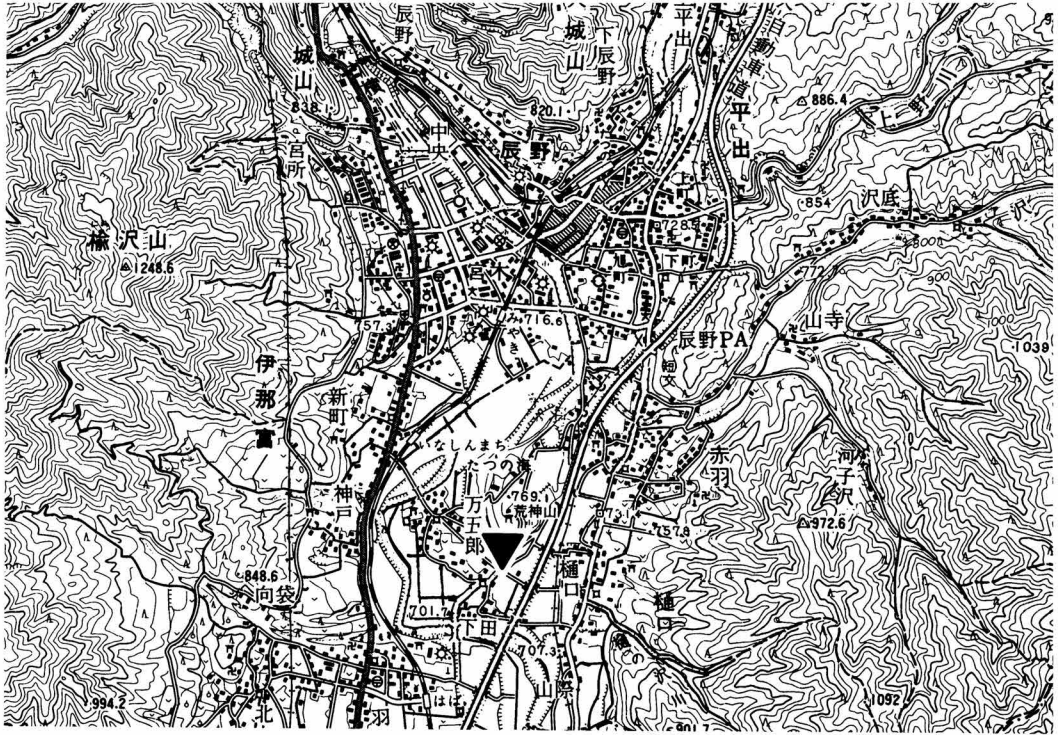
調査の経過

(窪畑遺跡)

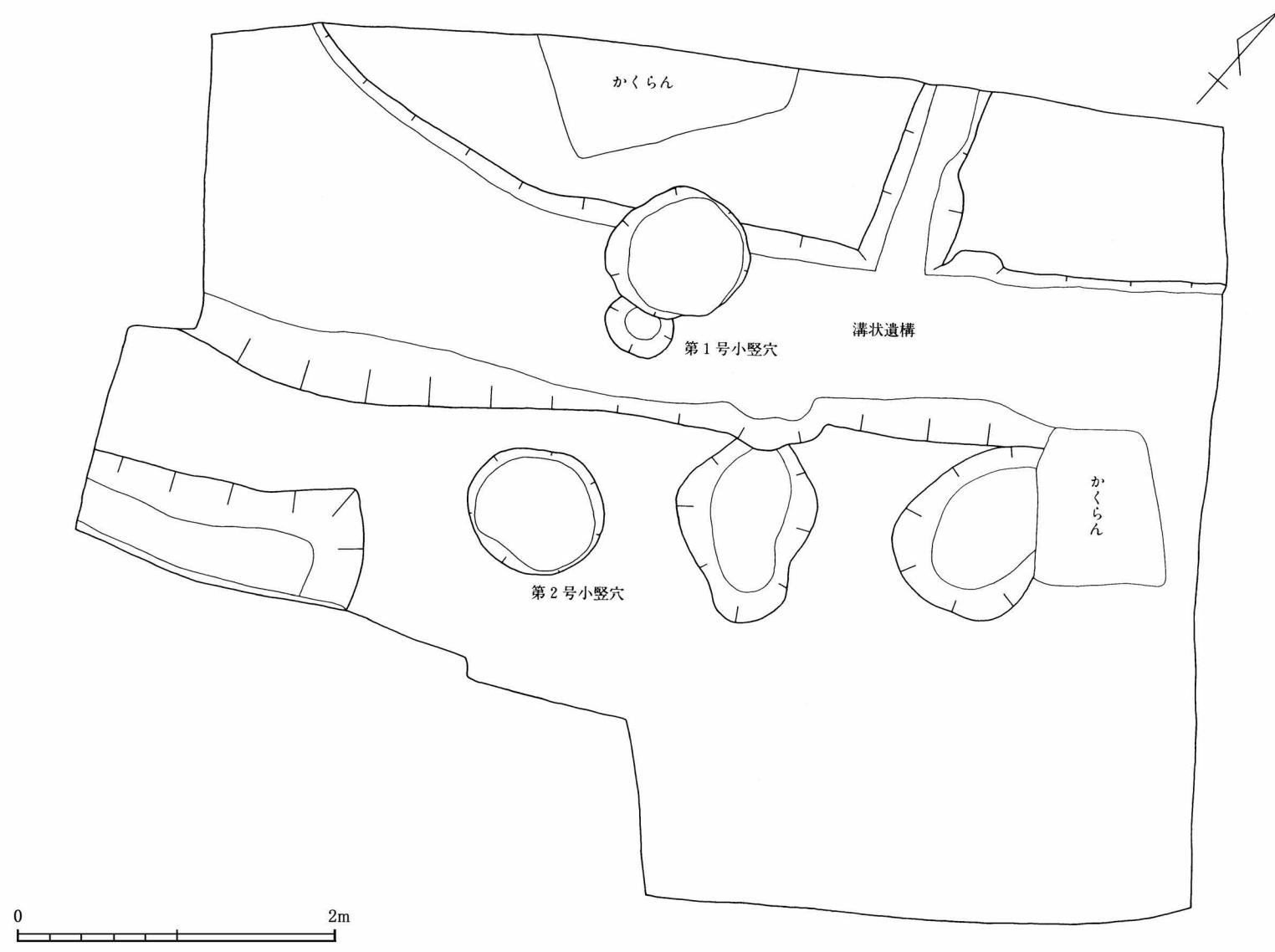
- 6月1日(土) トレンチの設定。
- 6月3日(月) 試掘調査開始、表土直下より河床礫層等が出土する。
- 6月6日(木) 第2トレンチより第8トレンチまでの試掘終了。
- 9月17日(火) 第1トレンチの試掘開始。
- 9月20日(金) 測量終了。

(荒神山おんまわし遺跡)

- 10月14日(月) 調査開始。トレンチ試掘の結果により、重機による表土剥ぎを行う。
溝状遺構の掘り上げ。
- 10月15日(火) 小竪穴の掘り上げ。
- 10月16日(水) 測量、写真撮影終了。



第1図 遺跡位置図



第2図 荒神山おんまわし遺跡（第4次）遺構平面図

II 調査概要

1. 荒神山おんまわし遺跡

今回の調査区は住宅地跡であったため、一部にかくらんがはいる、遺構の遺存状態はあまり良好とはいえなかった。検出された遺構は上部が削平されていた。これは昭和初期の区画整理の際のものと考えられる。この地区の地山は砂層であり、耕作土直下の北半部は褐色系の土でおおわれ、南半部は砂礫層であった。

溝状遺構

この遺構は幅1.4mでほぼ板橋川と並行して造られている。深さは約20cmであり、あまり深くはない。このような溝状遺構は昭和62年に調査された樋口五反田遺跡においても検出されており、その溝状遺構は北に向かうにしたがって次第に細くなり、途中で消滅してしまう。今回の調査地点はここより北東におよそ50mほどしか離れておらず、関連性が考えられる。しかし遺構からの出土遺物は弥生土器と平安時代の土師器・須恵器であり、時期の決定は難しい。また、この溝状遺構に直交するように幅0.4mの小さな溝状遺構が出土している。この溝状遺構は、前述の溝状遺構に切られている。遺物は弥生土器が出土しており、小さな溝状遺構は少なくとも弥生時代には遡ることができそうである。なお、大きな溝状遺構の東にある浅い落ち込みは自然のものと考えられる。

その他にも調査区の南東側に落ち込みを確認したが、遺構となるかどうかは不明である。

小竪穴

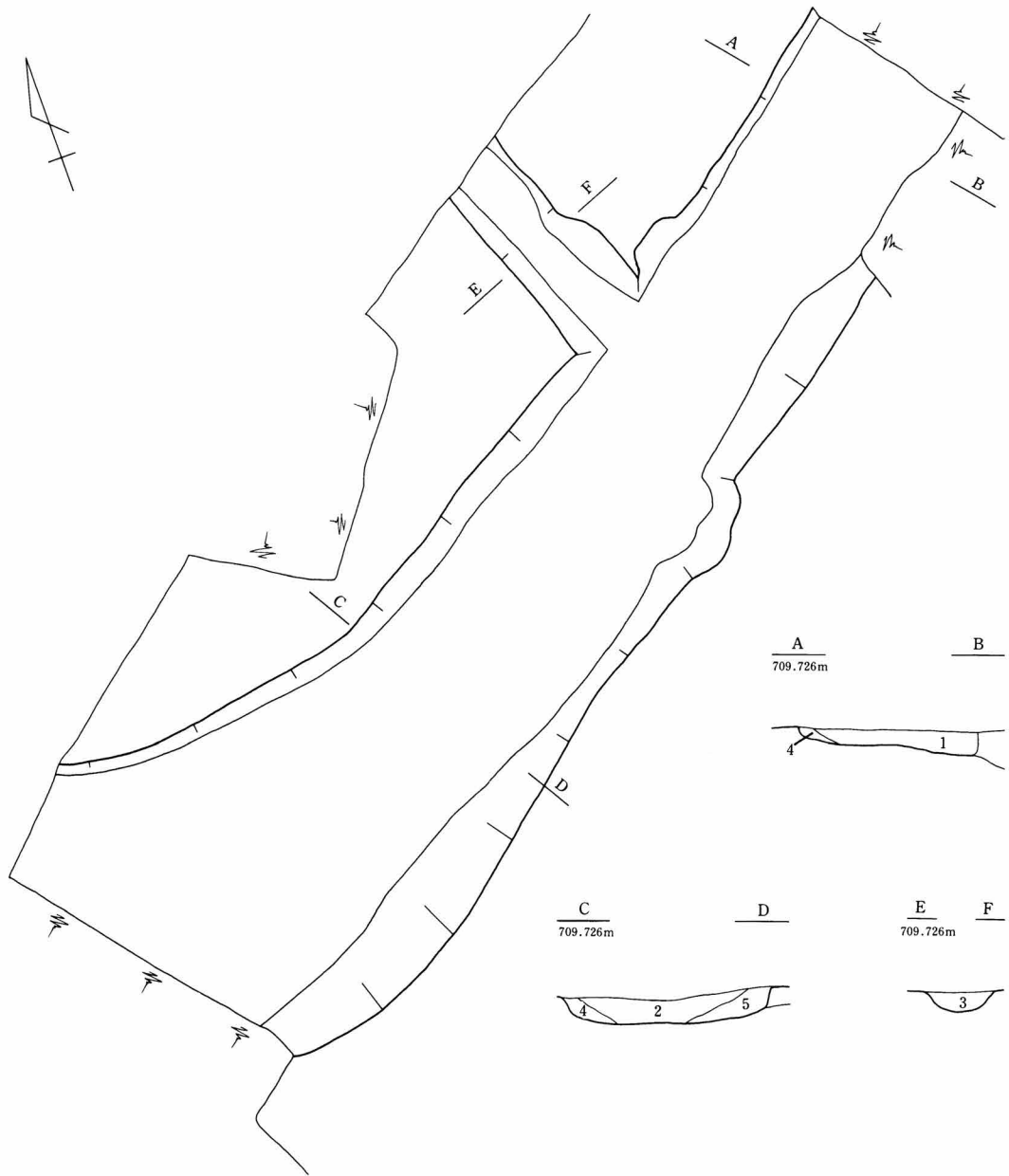
小竪穴は今回2基出土した。この2基を現段階では仮に第1号小竪穴・第2号小竪穴とする。

第1号小竪穴は、大溝状遺構に削られて出土しており、ピットによっても切られている。直径0.8m、深さは現存で約58cmである。全体的に黒褐色系の覆土であり、底及び壁面には鉄分が沈着し非常にかたい。また、ここからは無文の土器が3片出土している。

第2号小竪穴は大溝状遺構の東側にあり、直径0.8m、深さは現存で約64cmである。覆土はやはり黒褐色系の土であったが、壁は砂で非常に脆弱であった。また、遺物も出土していない。

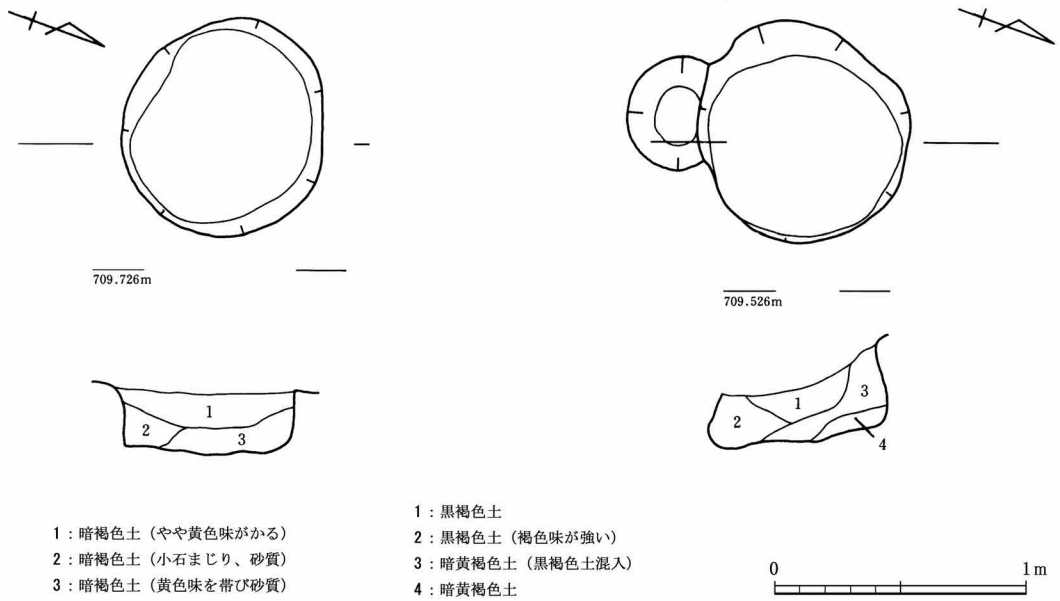
遺物

第6図-1～5は大溝状遺構より出土した土器である。3は弥生土器でありクシ描波状文を施している。1・5は平安時代の土師器である。4は須恵器の坏の底部である。2は時代は不明である。破片下部に粘土紐を貼り付けてヘラ状工具によるキザミを入れている。6は小溝状遺構より出土している弥生土器の破片である。クシ描波状文を施している。7～9は第1号竪穴より出



- 1 : 暗褐色土 (黄色土粒やや混入)
- 2 : 暗褐色土
- 3 : 黒褐色土
- 4 : 暗褐色土 (黄色土粒混入)
- 5 : 暗褐色土 (石が混入)

第3図 溝状遺構

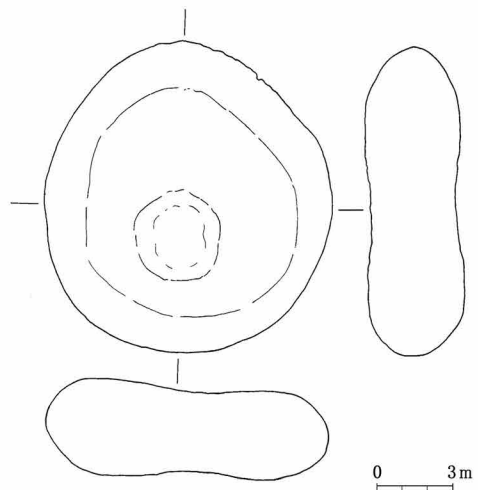


第4図 小竪穴実測図

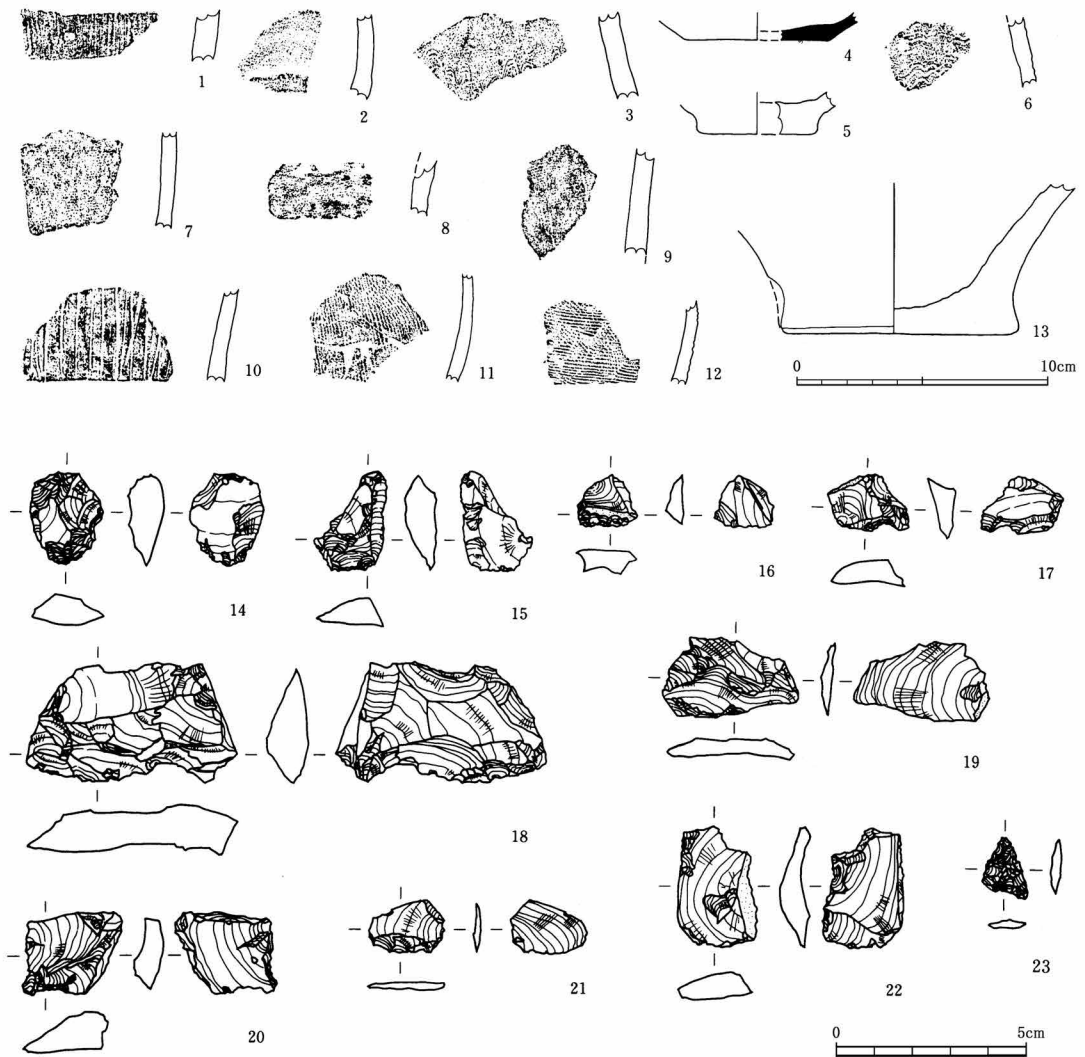
土した遺物である。いずれも無文であり、時代は不明であるが、焼成は非常によい。10～13は溝状遺構の東側の包含層より出土した遺物である。11・12は細かいクシ調整を施した破片である。10は縦位のクシ調整がされている甕の破片である。13は土師器の底部である。剥落が著しく、内面の調整は不明である。外面には縦位のヘラミガキの痕跡を留めている。

14～23は黒曜石である。14～20は大溝状遺構内より出土したものであり、14はピース・エスキュー、他は剥離痕のある黒曜石である。21は溝状遺構東側の包含層より出土しており、やはり剥離痕のあるものである。22・23はカクラン土内より出土しているが、22は剥離痕のあるもの、23は石鏃である。

第5図は凹石である。大溝状遺構内より出土している。縦12.4cm・横11.6cm・厚さ3.2cmで、表裏とも平坦に磨かれ、中心部付近に窪みがある。安山岩製であるがやや弱い石のため、製作痕等は明瞭に認められなかった。



第5図 石器実測図



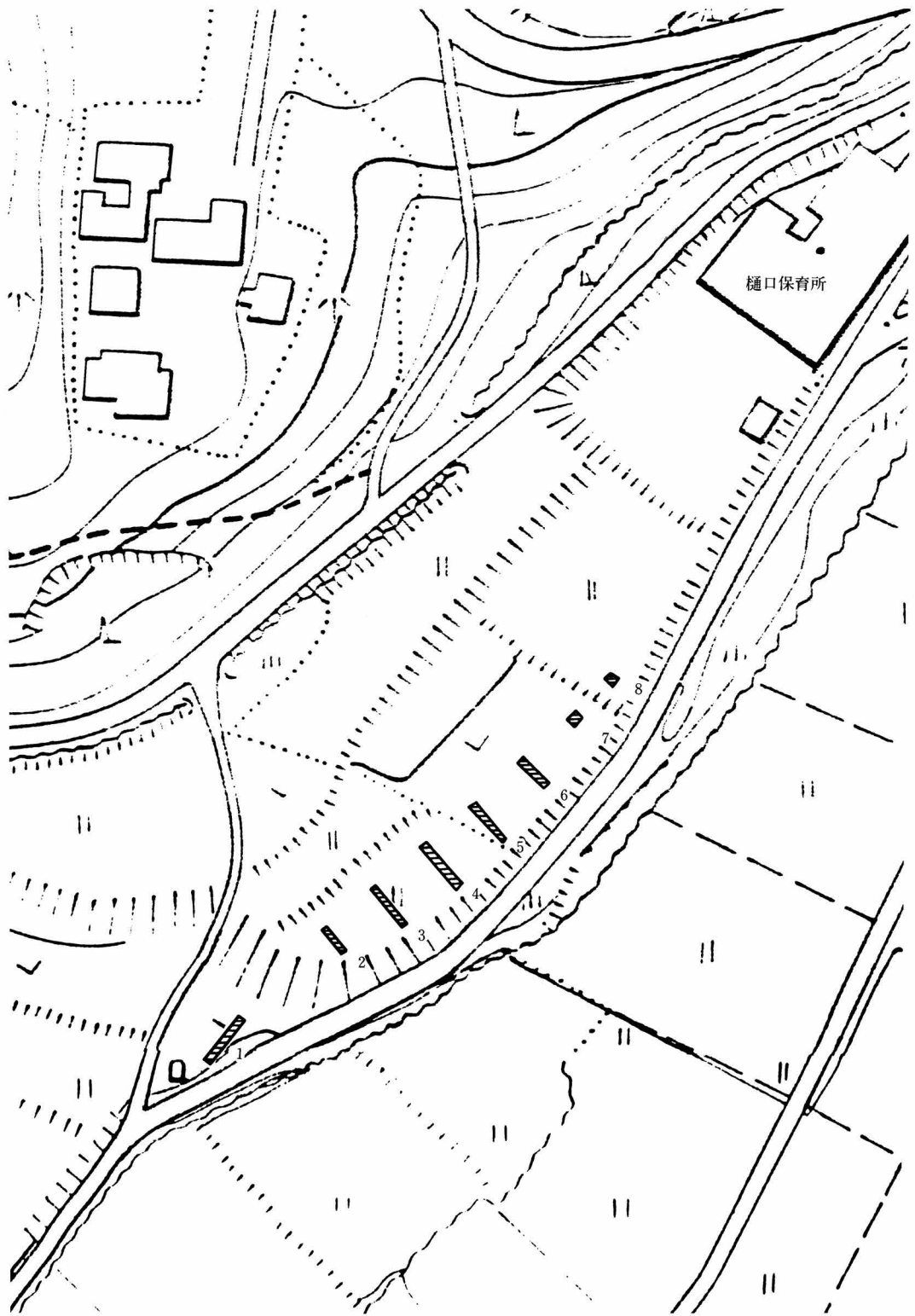
第6図 荒神山おんまわし遺跡出土遺物

2. 窪畑遺跡

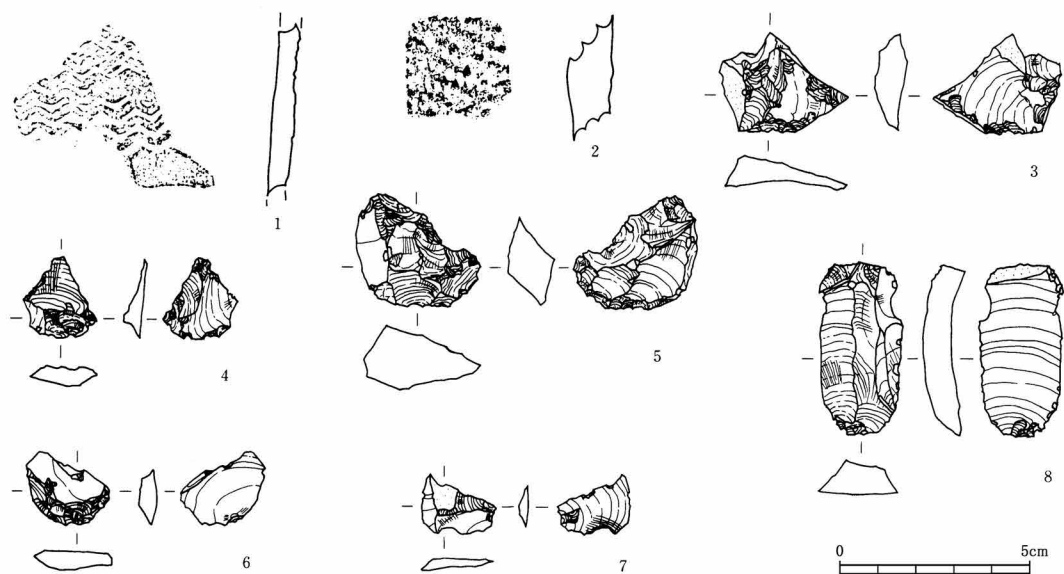
第1次調査においては、平安時代の住居址が4基、および縄文時代中期の住居址が1基出土しており、平安時代の住居址は区画整理事業によってほとんど削り取られてしまっており、床面のみが残っている住居址が2基であった。また、壁が残っているものでも東半分は削られており、ほぼ完全にのこっている住居址は1基も出土しなかった。

そのほかにも黒鉛のはいた押型文土器の破片が一括して出土している。

今回の調査地点は第1次調査を実施した東側の段丘先端部である。まずトレンチによる試掘調査を実施し、その後に遺構等の確認された地点を本調査する予定であったが、圃場整備時に重機



第7図 窪畑遺跡試掘トレンチ位置図



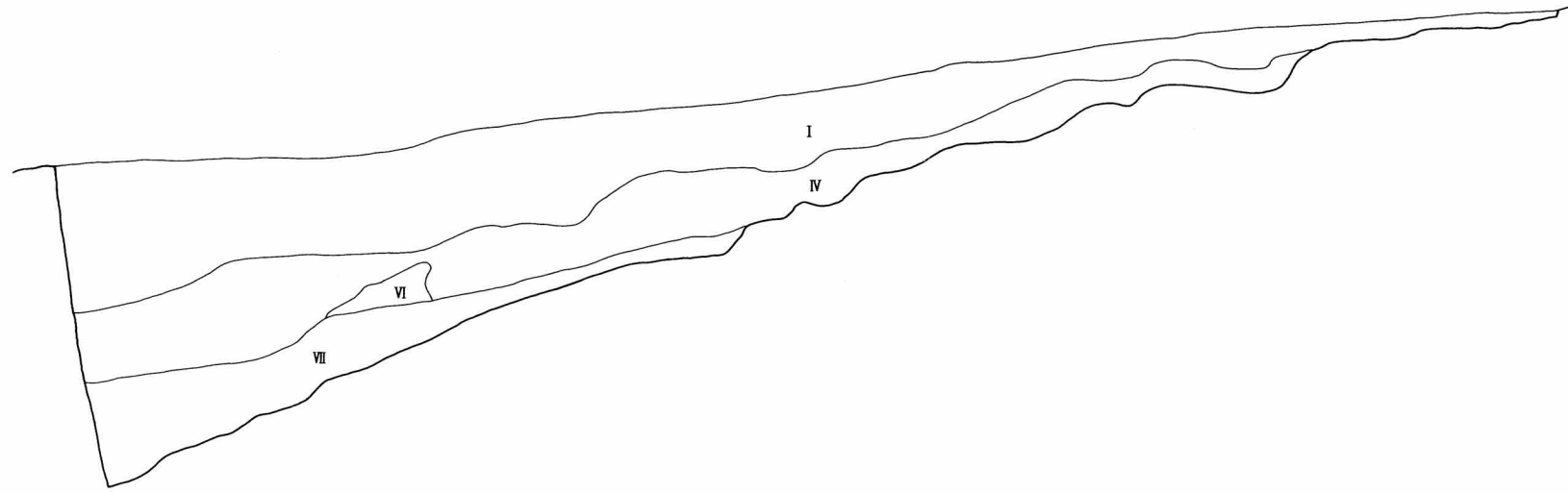
第8図 窪畑遺跡出土遺物

による表土除去が行われたのか、表土はおろか、ロームまでもほとんど存在しておらず、河床と思われる層のみが出土した。また、第1トレンチは段丘の斜面を試掘したが、ローム層上では急激に荒神山おんまわし遺跡の存在する段丘まで落ち込んでおり、その上層は段丘からの流れ込みによる土砂によって覆われており、遺構は確認されなかった。

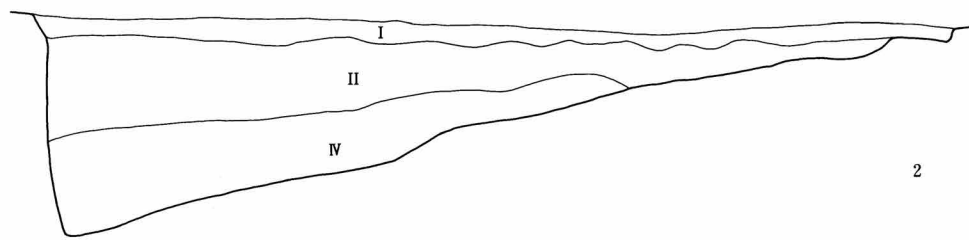
遺物

今回の試掘調査によって図示しうる遺物は第8図のもののみであった。1は押型文土器である。褐色を呈した焼成が良好なものであり、山型文が施文されている。下部には無文部分が残されている。2は縄文を施した土器であり、胎土には繊維を含んでいる。3～7は使用痕をもつ剥片である。8はピエス・エスキューと考えられ、上部と下部に打撃によると考えられる剥離がみられ、上部には打ち欠いて抉りがいれられている。

715.700m

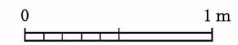
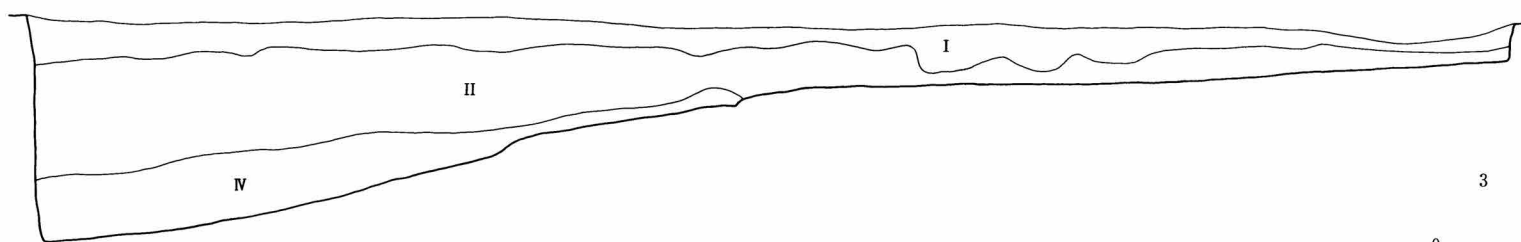


717.700m

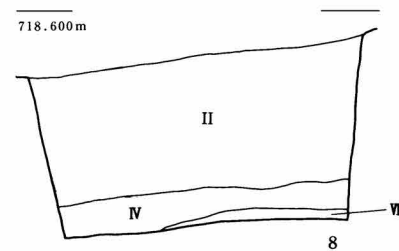
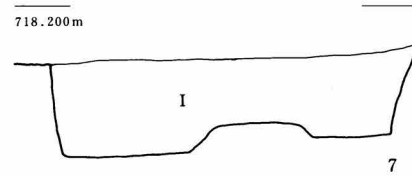
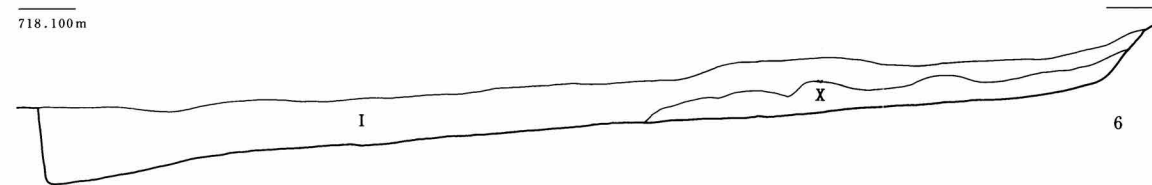
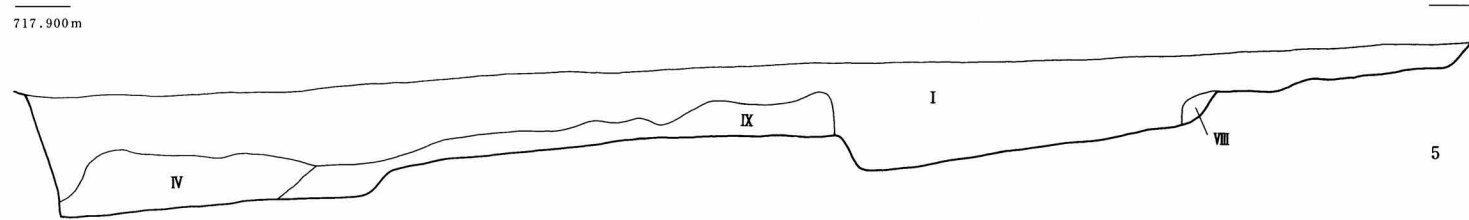
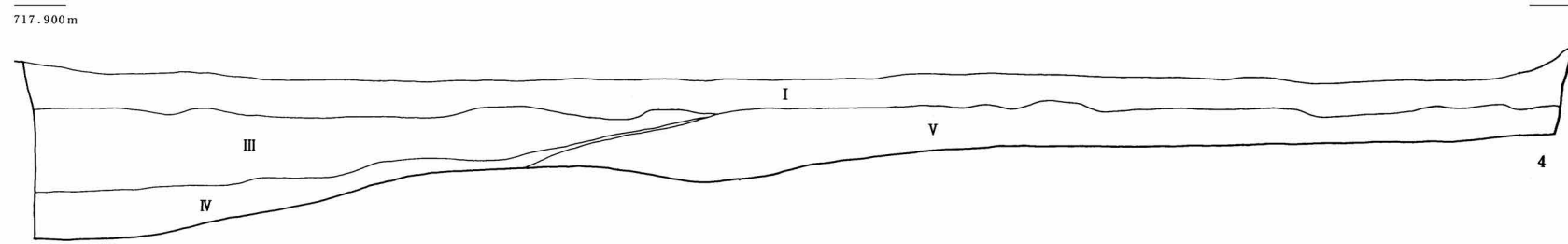


- I : 耕土
- II : 埋土
- III : 黄白色土 (やや青味を帯びる)
- IV : 暗褐色土
- V : 黄白色土 (やや青味を帯び、粘質)
- VI : 暗褐色土 (黄色土混入、小石多く混入)
- VII : 暗褐色土 (やや黄色味を帯び、小石やや混入)
- VIII : 青灰色粘質土
- IX : 青灰色粘質土 (礫多く混入)
- X : 青灰色砂礫土

717.700m



第9図 窪畑遺跡土層断面図(1)



第10图 窪畑遺跡土層断面图(2)

III まとめ

今回の調査において、窪畑遺跡はすでに削平されており、遺跡の全容を明らかにする手掛かりを得ることができなかった。しかし、この遺跡は板橋川との比高はおよそ12mであり、比高差は激しい。このため、今回調査した区域が東限ということができよう。この地区は、荒神山から延びてくる舌状の台地と考えられ、現在考えられている分布範囲よりも更に西側に広がっている可能性も考えられる。

荒神山おんまわし遺跡はやはりこの遺跡の分布範囲の東限を確認することができた。本年はさらに圃場整備事業に伴って実施した発掘調査によって西限および北限を確認している。これまでの調査によって南限については現在の天竜川の氾濫原までに広がっていると推定されることから、およそ3.6haにもおよぶ一大遺跡と考えることができる。この遺跡の低位の段丘に弥生時代の周溝墓群が存在していると予想され、第1次調査時にはその1段上位の段丘に弥生時代の住居址が8基出土しているものの、この住居址が周溝墓群とつながるものなのか、今後の検討課題といえよう。

そのほか今回の調査においては溝状遺構の出土があった。これについては樋口五反田遺跡第3次調査においても出土しており、樋口五反田遺跡の溝状遺構の直上層には黒色土層をのせている部分もあったもののその上層は耕作土となっており、本来の溝状遺構の深さは確定できない。しかし、報告書では溝状遺構最下層において砂・小礫混じりの層が確認され、排水溝の可能性があると指摘している。今回調査した溝状遺構では最下層には砂・小礫等を含む層は認められなかった。さらに上層は住宅建設の際に削平あるいはかくらんされており、実際にどのくらいの深さの溝状遺構であったのかは不明である。このように、前回の溝状遺構と、今回の溝状遺構とは様子が異なっており、同一視できないとも考えられる。しかし、両者とも荒神山おんまわし遺跡の東限に位置しており、弥生時代における荒神山おんまわし遺跡に関する遺構の可能性は十分に考えられよう。

末筆となりましたが、今回の発掘調査にあたり、終始ご協力を頂いた伊那建設事務所、小野工業株式会社、そして直接調査に携わった方々に厚く御礼申し上げます。

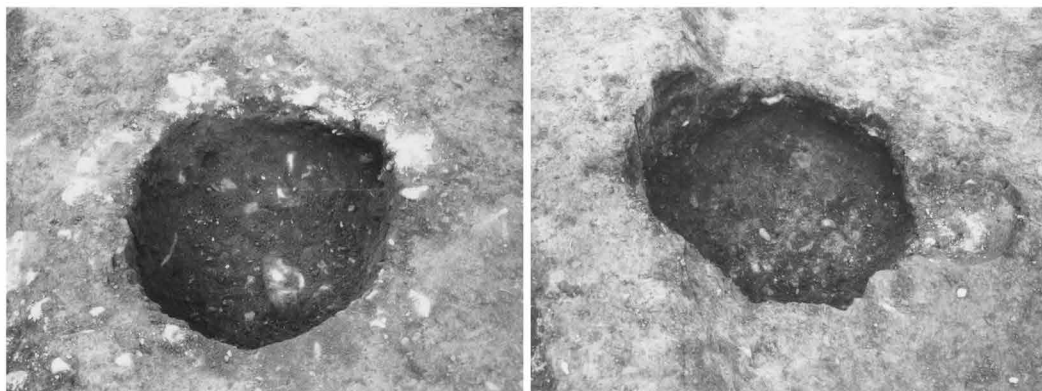


窪畑遺跡試掘トレンチ

図版 2



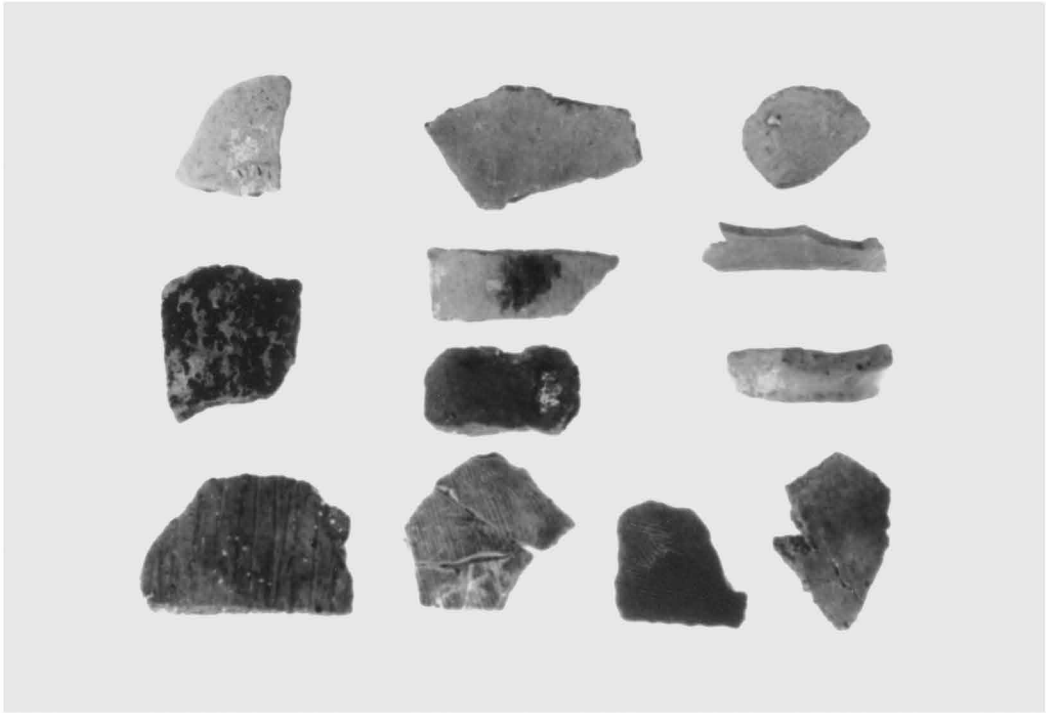
荒神山おんまわし遺跡全体写真



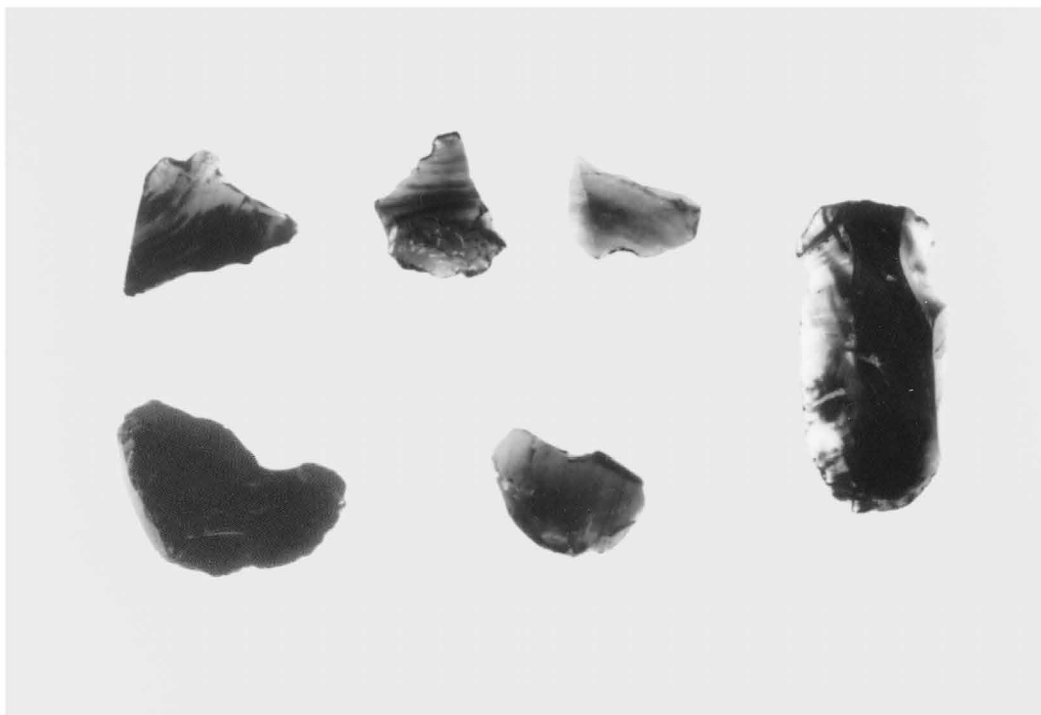
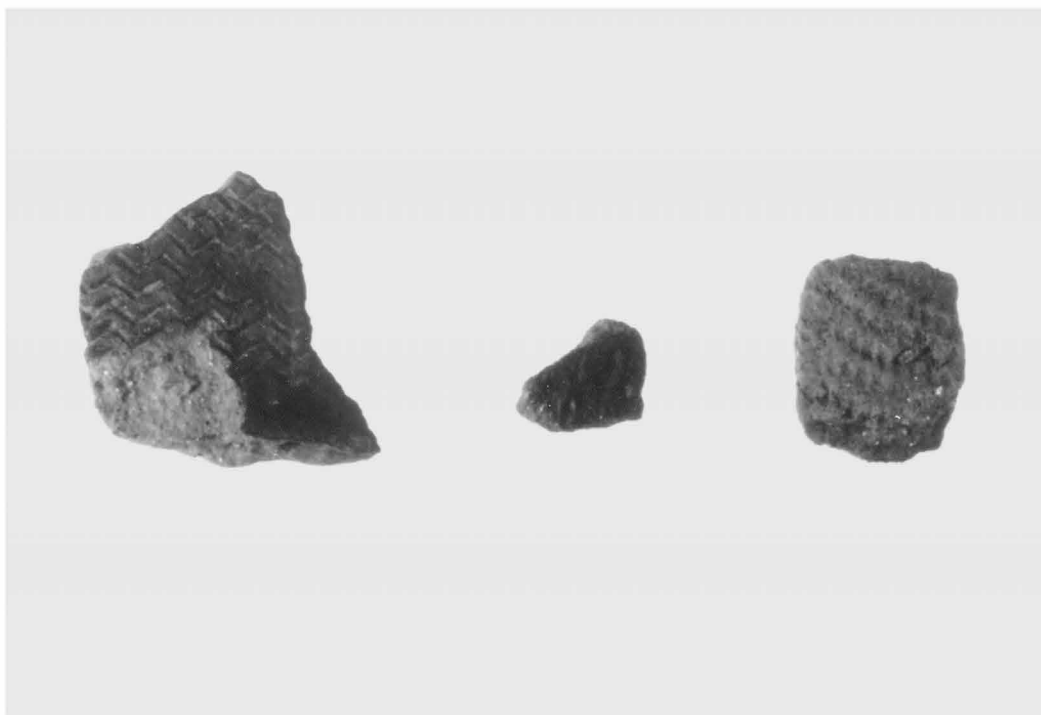
小豎穴



荒神山おんまわし遺跡出土遺物（1）



荒神山おんまわし遺跡出土遺物（2）



窪畑遺跡出土遺物

荒神山おんまわし遺跡 窪 畑 遺跡

緊急地方道整備事業 県道与地-辰野線拡幅
事業に伴う平成3年度発掘調査概要報告書

発行日 平成4年2月20日

編集・発行 辰野町教育委員会

〒399-04

長野県上伊那郡辰野町中央1

☎0266(41)1111(代)

印刷所 ㈱小松総合印刷所
